

**令和 4 年度 尚綱中学・高等学校
学校評価**

（評価対象年度：令和 4 年度）

学校教育目標

1	智と徳を兼ね備え、社会に貢献できる自立心豊かな近代女性の育成を目指す学校
2	尚絅で学んで良かったと生徒・卒業生・保護者が真に思う学校
3	地域で存在感のある学校

重点目標

1	特色ある教育の確立
2	教育の質向上
3	生徒支援の確立
4	地域貢献の充実
5	学習意欲あふれる生徒の確保

自己評価総括のランクは、**A B C**の3段階とし、次頁以降の「自己評価」で2/3以上A評価となった重点項目を「**A**」ランク、2/3以上AまたはB評価を「**B**」ランク、それ以外を「**C**」ランクとしている。

重点目標に対する自己評価総括

1	特色ある教育の確立	B	昨年度に比べるとコロナウィルス感染症についての対処も分かり、徐々に学校行事や講話なども実施できた。また今までの経験を通してICT教育も随分充実し、必要に応じて支援員の協力を頂きながらZOOMを併用した取り組みが確立された。今後も感染拡大については油断することなく、with コロナの対策を推し進めていきたい。
2	教育の質向上	B	「教育の質」については様々な意見があるが、私学にとっては「建学の精神」に則って、学力だけでなく総合的な人間力を高めることが大事と考えている。そのためには、日頃の学校生活の質をいかに高めていくかは教師の指導力向上が急務である。限られた時間の中でいかに一人ひとりが自分の指導能力を向上させるかが今後の課題となる。
3	生徒支援の確立	A	withコロナの状況が確立しつつある中、生徒会を中心に学校行事やボランティア活動も以前に比べると積極的に行うことができた。また、課題を抱える生徒の数も増加してきたが、カウンセラーによる手厚い指導並びに担任や保護者との密な連絡により、十分な支援が行われた。次年度は再開した学校行事に育友会、花桜会に協力を求め、学校全体の連帯感を強めていきたい。
4	地域貢献の充実	A	コロナウィルス感染症拡大の為、中止になっていたソフトテニス部の尚絅杯を再開したり、小学生対象の英語暗唱大会を中学生にも出場枠を広げ、より多くの発表の機会を提供することができた。また、熊本城マラソンのボランティア活動を始めフードバンクや阿蘇の植林活動等、充実した活動ができた。今後も継続して取り組んでいきたい。
5	学習意欲あふれる生徒の確保	B	今までの広報活動に加え、データ分析やZOOMを利用した校舎紹介など生徒確保のために広報部を中心とした新しい取り組みが随所に見られた。特にHPのリニューアルや生徒の活躍をできるだけ早くアップし、外部への発信にも注意を注いだ。また、今年度は部活動の特技特待生勧誘の幅を広げ、積極的に取り組み、その成果は上がった。しかし、目標とする高校220名、中学30名の確保には及ばず次年度への課題の洗い直しが急務である。

自己評価

令和4年度 尚絅中学高等学校 学校評価

		評価の観点	具体的な目標・施策	評価	成果及び課題
特色ある教育の確立	人間教育プログラムの充実	外部人材・事業の活用	外部の専門家の活用により授業以外の専門的知識を深める。	A	コロナ感染の状況に応じて、情報モラル教育等、対面・オンラインで工夫しながら実施した。
		グローバル教育の充実	留学生との交流や外部団体との連携により国際感覚を養う。	A	9月よりタイからの長期留学生を受け入れ、オンライン留学の積極的な参加を全校生徒に行った。
		礼法教育の確立	学校の諸活動を通して学んだ礼儀作法を日常生活に役立てる。	B	全校で実施しているマナー検定の内容、あり方等、廃止も含め検討が必要である。時代に即した取り組みに着手する必要がある。
		諸活動のPDCAサイクルの確立	教育の柱となる各部の活動を集約し、計画を策定する。	B	感染予防を講じながら年間計画に則り実施した。
	魅力ある授業の確立	教科指導力の向上	教科指導力向上の為、研修会参加や外部講師の助言を仰ぐ。	B	I C Tを中心としたオンライン研修や外部指導者を招き、全教職員参加の教科を超えた研究授業に取り組んだ。
		授業改善の確立	生徒へ魅力ある授業を提供するために研究授業等の充実を図る。	B	校内での研究授業や授業見学を実施し自己研鑽に役立てた。
		I C T教育の充実	I C Tの利活用により生徒に様々な情報を提供する。	A	ICT支援員による研修会、研究授業など計画的に実施した。卒業生による進路記録を作成し研究に役立てた。
	進路指導の充実	進路指導力の向上	進路指導部を中心に入試改革の研究を行い、指導力向上を目指す。	B	外部研修会資料を各部・学年で共有し、入試改革についての情報共有・研究に努めた。
		進路研修会の充実	外部研修会参加、A L、新入試制度の対策を行う。	A	オンラインでの研修会に各教職員が参加し、指導力向上や情報収集に努めると共に、情報共有を図った。
		進路実績の向上	各入試選抜に応じた受験指導を強化する。	B	模試の結果分析を進路指導部・学年を中心に行い、面談等で有効活用した。
		課外授業の確立	各コースの進路希望に応じた内容の充実に努める。	B	習熟度別の課外や進路別特別時間割を組んで実施したが、希望課外については受講教科や学年によって偏りが見られた。
		個別指導の強化	各種検定試験合格、入試志望先に応じた小論文指導や個人指導を実施する。	A	検定試験対策や小論文指導、その他入試対策などの個別指導を実施した。小論文指導に於いては教員の指導力が問われる。
		進路指導体制の研究と実践	講演会や進路指導情報誌の発行、また、多くの情報を提供する。	A	コロナウイルス感染拡大により研修会が減少したが、可能な範囲で情報提供を行った。
		各コースの教育内容の研究と実践	コースの特色を活かし、より効果の高い編成を検討する。	B	コース別に取り組んだが、多様化される入試に向けて今後も検討を重ねていく。
		特色あるカリキュラム・選抜クラスの充実	最新の情報収集を行い、カリキュラム委員会で検討、策定する。	B	高校での新カリキュラム、全校45分授業5日制を実施した。今後更に土曜日の休みを利用した取り組みの検討が必要である。
		各種検定試験の充実	各種検定試験を推進し、取得資格を活かした進路実現を奨励する。	A	各教科や委員会を中心に計画的に実施し、成果が見られた。
	中高大連携の強化	内部進学の実現	内部進学のメリットやより多くの情報を提供する。	B	進路指導部を中心にして内部進学の情報提供を生徒・保護者へ行ったが、生徒の質の向上並びに生徒指導の徹底が課題である。
		高大進学連絡会の充実	高大相互の情報を共有し、内部進学者の進路達成の一助とする。	B	尚絅大学の学部・学科説明、新学部の説明会を生徒保護者に行った。
		中高大連携事業・授業の確立	総合学園としての特色を活かし生徒の進路志望の実現を図る。	A	大学授業体験を計画的に行った。
		広報活動の連携強化	中高だけでなく大学との連携による一貫教育の良さを強化する。	B	中高入試アドバイザーを中心に、大学入試センターとの情報交換を通して、広報活動に活かした。
教育の質向上	主体的・対話的で深い学びの授業の確立	教育の特質を活かした取り組みの研究と実践	教科会の充実を図り、A L、Classi等を利用した取り組みを実践する。	B	オンライン等での研修会参加や授業見学を行い、教科会で検討した。
		言語能力の確実な育成	プレゼンやディベート等を通して言語能力の育成をする。	A	探究授業や放課後を利用し、プレゼンテーション指導を行い、入試に役立てた。
		教科の横断的な学習の充実	他教科とのコラボを図りながらより広い知識を習得する。	B	全職員による授業研究を行い、指導力向上に役立てた。
	カリキュラム・マネジメントの研究と取り組み	社会に開かれた教育課程の研究	新学習指導要領に則り、地域をフィールドとした研究を推進する。	B	探究活動、SDGsの活動を地域に広げ体験学習を兼ねた取り組みを行った。
		理数教育の充実	論理的に問題解決を図る能力を育成する。	B	研修会に参加し、各教科で情報の共有を行った。
		伝統や文化に関する教育の充実	伝統文化の知識・技術及び考え方を学び必要な資質の育成を行う。	A	授業を通して必要な知識・技術等を学んだ。
		キャリア教育の充実	学校と社会の接続を考え、身につける能力・資質を育成する。	B	活用する教材の見直しも含めて、取り組みの再検討を行う。

自己評価

令和4年度 尚絅中学高等学校 学校評価

		評価の観点	具体的な目標・施策	評価	成果及び課題
生徒支援の確立	奨学生制度・表彰制度等の活用	制度を活用した生徒の支援	学力・特技に秀でた生徒を選考し支援する。	A	計画に則って、選考・採用が決定した。
	課外活動の充実	生徒会活動の充実	生徒会執行部を中心に学校行事等の企画・運営を推進する。	A	コロナの感染状況により形式や実施時間を変更し、生徒の意見を取り入れながら、ほぼ生徒会行事を実施した。
		部活動の充実	部活動を通し、心身の調和がとれた人間教育の一環を目指す。	A	競技により実施状況が異なったが、九州大会、全国大会で活躍した。
		ボランティア活動の強化	活動を通して奉仕の精神を育成し、地域貢献に資する。	A	中止となったボランティアも多かったが、フードバンク寄付をはじめ、子ども食堂の手伝い等、可能な限り参加した。
		リーダー養成の活性化	研修を重ねながら、リーダーとしての自覚を促し養成を図る。	B	リーダー研修会は実施出来なかったが、生徒会を中心に定期的な委員会や部活動で主体的に取り組み、校内外の活動の充実に努めた。
	教育相談の充実	生徒支援体制の確立	生徒理解を深めるため、情報共有を充実させる。	A	環境保健部を中心に全職員対象の生徒情報共有を行い、職員間の連携を深めた。
		カウンセリングの充実	スクールカウンセラーを中心に問題の早期解決を図る。	A	全校で2・3者面談を実施し、各担当者を中心に連絡を密にして早期対応に努めた。
		外部組織・人的支援の活用	県の支援事業等を活用しながら問題解決に当たる。	A	課題を抱える生徒が増える傾向にあり、本校のカウンセラーの個別対応で充実した学校生活が送れている生徒が多い。今後、県の相談員とも連携を取っていく。
	育友会・後援会・同窓会との連携の確立	学校行事での連携強化	学校との連携を図り、学校行事の一層の充実に努める。	B	コロナの感染状況により無観客での実施が増加し、協力をお願いする機会が減った。
		保護者会の充実	学校と保護者の協働による教育体制を充実させる。	B	感染状況を踏まえ、対面とZoomの両方を活用するなど、工夫しながら実施した。
		同窓会・後援会総会等への出席の確立	学校と連携を推進し、協働体制を確立する。	A	同窓会には管理職が出席をして、学校の現況を報告したが福岡支部は今年度で閉じる結果となった。
地域貢献の充実	地域活動の支援	部活動等の合同練習会開催の確立	他校や他団体との繋がりを持ち、生徒の活動の場を広げる。	B	感染予防に注視しながら合同練習会や練習試合を実施した。
		ボランティア活動の充実	地域に密着した活動を通して貢献する姿勢を養う。	A	熊本城マラソンボランティア、子ども食堂ボランティア、九品寺校地周辺の清掃活動や産業道路沿いの花壇への植栽を実施した。
	学校主催事業の充実	本校主催の各種大会の開催	部活動の活性化と各種大会を通して広報活動の一助とする。	A	今年度より英語暗唱大会を小学生だけでなく中学生まで広げて実施した。また、ソフトテニスも尚絅杯を再開した。
学習意欲あふれる生徒の確保	広報活動の充実	活動内容の再検討	より効果的な活動計画を策定し実施する。	A	コロナ感染の状況を見ながら非集合型・非対面型の個別相談を実施するなど今までの経験を活かした広報活動ができた。
		広報部員のスキルアップ	外部講師による研修を行い、実践に役立てる。	B	外部講師による研修会は実施できなかったが全職員で中学校・塾訪問時の共通理解を行った。
		ホームページの充実	迅速に内容をアップし広報活動の一助とする。	A	部活動や学校行事のアップを迅速に行った。
		全職員対象研修会の確立	マナーなどの指導を徹底し職員の広報力の向上を目指す。	B	入試アドバイザーと連携しながら学校訪問や説明方法を全職員に徹底し、訪問活動を実施した。
		広報部の組織改革の可視化	計画の構築、実践攻略等を中心に全職員の動きを可視化する。	B	学校全体の行事計画に則り、計画的に取り組んだ。
		入試内容の検討	受験生獲得のため問題内容の検討を充実させる。	A	公立高校入試問題の腕試しとしての受験ができるように各教科で工夫し、定着しつつある。
		小学校・中学校・学習塾・個別訪問活動の充実	広報の活動区域を広げ積極的に訪問活動を行う。	B	感染状況に応じた訪問活動を再構築し、入試アドバイザーとの連携を取りながら訪問活動を重ねる。
	入試制度の改革と訪問の強化	制度の周知徹底	入試アドバイザーと共に、小中学校、塾で丁寧な説明を行う。	B	小中学生対象に様々な広報活動を行ったが目標値には届かなかった。入試説明会での教科説明の充実をはかれた。
		特待生制度を活用した学力・特技に優れた生徒獲得の確立	学力・特技に秀でた生徒を獲得し、本校生徒の牽引者を育成する。	A	今年度は昨年度の反省を基に早めの取りかかりと特待生の数を広げてアプローチしたために数の増加が見られた。
		指導者との連携の強化	対外試合や習い事教室等の場を利用して情報を得る。	B	大会・試合が中止になることもあったが、各指導者と連携をとりながら生徒情報を得た。
		入試制度の検討と充実	特待生制度の見直しを行い生徒獲得に繋がるように取り組む。	B	中学校の特技特待生の質向上のために合否ラインを検討する必要がある。
	小・中学生対象広報活動の強化	本校主催の大会等の充実	地域の諸活動の支援を行うと共に部活動の活性化を図る。	A	英語暗唱大会は今年度より広報効果を考え、中学生に枠を広げた。ソフトテニス部の尚絅杯を再開して好評を得た。
		入試改革の達成	中学入試を中心に入試科目を検討し、本校の特色を打ち出す。	B	中学入試に英語を取り入れて3年目となり、本校の特色の一つとして今後も広報に力を入れる。
		小学校・英語塾等の訪問強化	本校の英語教育の成果や一貫教育の利点を広める。	B	学校説明会などを利用して一貫コースや英語教育の特色をPRした。

学校生活に関して「生徒」「保護者」にアンケートを実施しました。

○：よくあてはまる・ややあてはまる ●：あまりあてはまらない・全くあてはまらない

生徒による評価				生徒による評価の総括
1	尚絅に入学して良かった	○ 76 %	● 14 %	今年度もコロナの影響を受けたとはいえ、withコロナの生活習慣も身についてきた。熊本は夏に爆発的な感染者数になったが、学校の対応に保護者、生徒が協力的であり、生徒ひとり一人が気をつけて生活してきたおかげで学校運営ができたと感じている。①の「尚絅に入学して良かった」という満足度が7割程度になっていることは教職員一同謙虚に、また真摯に受け止めなければならない。コロナ禍で学校行事や生徒会行事にも制約があったが、その現状はどれも同じである。何が原因で満足度が低くなっているのか原因究明が急務であると考えている。その満足度こそが生徒数確保にも繋がる。現在在籍している生徒の為にどの程度熱意をもって関わられるか、また、変わりゆく教育界の中で何が求められているのか、どのような教育が必要なのか教師自身が探究を深めながら取り組まなければならない。
2	友人と仲良く楽しい学校生活を送っている	○ 93 %	● 5 %	
3	学力向上を目指して積極的に取り組んでいる	○ 85 %	● 6 %	
4	しつけ・礼法教育に積極的に取り組んでいる	○ 91 %	● 6 %	
5	部活動が盛んである	○ 93 %	● 5 %	
6	進路指導が適切に行われている	○ 83 %	● 9 %	
7	施設・設備が充実している	○ 96 %	● 2 %	
8	掃除など環境美化に取り組んでいる	○ 87 %	● 10 %	
9	新型コロナウイルス感染症に対して適切な対応を行っている	○ 90 %	● 5 %	

保護者による評価				保護者による評価の総括
1	尚絅に入学させて良かったと思う	○ 75 %	● 14 %	生徒同様に「尚絅に入学させて良かった」と思わない保護者が1割以上いることは深刻に考えなければならない。①の満足度が低いことと同様に⑥の「進路指導が適切に行われている」の77%という結果は毎年相変わらずで、教師の一層の努力が必要である。生徒の進路指導は将来に関わる重要な問題であり、この2点が一番低い項目であることが意味することは何かを教職員全員で検討し、取り組むべき具体的な問題に注目し、早急に着手する必要がある。しかし学校生活の中で友人関係やしつけ、礼法教育に関しては概ね満足度が高い。礼法教育については現在の社会状況や教育の方法を踏まえ、継承すべきものと変えるべきものを精査しながら取り組んでいく必要があると考えている。
2	友人と仲良く楽しい学校生活をすごしていると思う	○ 89%	● 2 %	
3	学力向上を目指して積極的に取り組んでいる	○ 82%	● 6 %	
4	しつけ・礼法教育に積極的に取り組んでいる	○ 89%	● 6 %	
5	部活動が盛んである	○ 81%	● 13 %	
6	進路指導が適切に行われている	○ 77%	● 10 %	
7	施設・設備が充実している	○ 94 %	● 4 %	
8	掃除など環境美化に取り組んでいる	○ 85%	● 11 %	
9	新型コロナウイルス感染症に対して適切な対応を行っている	○ 85 %	● 8 %	

学校評価委員（保護者の代表・同窓生の代表）に評価をお願いしました。

学校評価委員会からは今年度も温かいご意見をいただいた。

- 生徒、保護者共に「尚絅に入学して良かった」という満足度が低い原因は何かを探る必要性があるのではないかと。個々によって教育内容や指導に於ける要求が異なるため、非常に難しい問題である。保護者が子どもたちをどのように育てたいのかを把握し、厳しさを求めているのであればどこを厳しくしてほしいと考えているのか等をじっくりと話しながら、満足度の低いその原因をつかむことが大事である。高校3年生になると進路相談の時間も増えより一層教員と生徒の関係が深まるため、より細かい対応が可能となり満足度は上がっていくのではないかと。
- コロナウイルス感染症流行により、令和2年度においては、生徒は始業式後あるいは入学後すぐに休校になったが、先生方の対応が非常に細かく全く不安はなかった。今年度も、コロナ禍でできることを見極めて、できることをよくやったのではないかとという評価を頂いた。また、価値観が異なる保護者もいるため先生方も大変だと思うが、全体的に優しい先生が多いと感じた。
- 学校説明会に参加した保護者から、教育環境の素晴らしさは勿論、熱心な先生が多く、塾に行かなくても先生方が熱心に指導して下さり「尚絅に是非とも通いたい」と思い入学したと聞いた。また、今年度より変更した45分授業×7時間授業も部活動の開始時間にも配慮されていて、土曜日も休みになり、とても良い環境づくりだと感じる。また、熊本城マラソンボランティアなどのボランティア活動にも熱心で、十分な社会貢献ができていると感じる。本当に心優しい生徒が多く、ボランティアでは尚絅の生徒が他校の模範となっていて嬉しかった。

■総合評価

① 特色ある教育の確立

新型コロナウイルス感染症の影響により教育活動に制限はあったが、withコロナの方針の下、感染拡大防止に努めながら外部人材を活用した対面による情報モラル教育等を開催したり、タイからの留学生との交流やオンライン留学の積極的な参加を全校生徒に促したりしたこともあり、コロナ禍でのグローバル教育の充実を図れた。しかし、各コースの進路希望に応じた希望課外については、受講教科や学年によって偏りが見られた。また、中高大連携の強化による内部進学については、進路指導部を中心に生徒及び保護者への情報提供を行ったものの、上手く伝えられていない面があった。次年度は、希望課外と高大進学連絡会の在り方を見直す必要がある。

② 教育の質向上

私学に於いて生徒数の確保は重要な問題であるが、その根幹となるのが教育の質である。学力向上や進路保障は勿論、部活動や学校行事、生徒会活動等を通して総合的な人間力をつけ、生きる力を身につけて卒業させることが必須である。本校でどのような教育を受け、社会でどのような活躍ができるのか、また貢献できるのかを身近な日常生活から固めていくことが、教師ひとり一人に求められている。そのために自分はいつ、何を具体的におこなっていったらよいかを考えることは重要なことである。特に、今までの教育の在り方と異なり、主体的に自分で課題を発見し、解決する能力の育成は各教師自身が自分の教科、クラス運営、部活動での指導など具体的な取り組みが求められ、今後の課題となる。

③ 生徒支援の確立

課題を抱える生徒、保護者が増える中、また抱える課題も複雑化しており、カウンセラーの責任や役割が大きくなっている。本校はカウンセラーのきめ細かいケアと環境保健部、教職員の連携により早めの対処ができています。しかし、一方ではカウンセラーへの偏った重責が課題である。また、経済的支援に関しては学内並びに花桜会、外部の奨学生制度を活用し、充実した支援に繋がる働きができたと考えている。少しずつ復活した部活動や学校行事においては、育友会、花桜会との連携は限られているが、常に心を寄せてくれていることに感謝したい。

④ 地域貢献の充実

夏に爆発的なコロナ感染症数となり、中止となった活動やイベントはあったが、ボランティア活動においてはフードバンクや子ども食堂、ウクライナ支援、3年振りの熊本城マラソンボランティア等積極的に参加することができた。今後は全校生徒が自主的に参加する環境作り、意識作りが課題である。また、塾やクラブチームに対しても地域貢献という考えを柱に、本校の施設利用を積極的に活用してもらうように働きかけ、学園全体で協力体制を構築していくことを再認識したい。

⑤ 学習意欲あふれる生徒の確保

新型コロナウイルス感染症の状況を見ながら、個別相談を多く実施したり、特技特待生の獲得に顧問が積極的に動いた。また、本校主催の大会等の再開や充実を図ったり、学校ホームページに生徒の活躍や学校行事等の内容を迅速にアップしたりしたこともあり、高校においては昨年度よりも多くの受験生を獲得することができた。しかし、中学・高校とも定員充足までは至っていない。本年度の取組で成果があったところは継続し、成果がなかったところは原因を追究し改善する。また、学校パンフレットを刷新し、小学校・中学校及び学習塾等への訪問を計画的に実施し、学習意欲あふれる生徒の確保に努める。

■令和5年度への課題・改善方法

- ① 学校生活に関する生徒及び保護者のアンケート結果では、両者ともに「尚絅に入学して良かった」と「進路指導が適切に行われている」の満足度が低くなっている。まずはその原因を明らかにし、その対応を早急に行う。
- ② 学校教育の充実は「力量の高い教師集団」と「好奇心旺盛な生徒集団」と「学校を温かく見守ってくれる応援団（育友会や花桜会）」の三者がうまく具合に機能し一体化した時に実現すると言われ、その中でも力量の高い教師集団の存在は大きい。次年度からはコロナ禍によって飛躍的に進んだICT教育とコロナ以前の活動の融合が必要であり、その確かな融合のためには教師の教育力の向上が必要である。全教職員が学ぶことを忘れず、教育力の向上に努める。
- ③ 高校での新学習指導要領の実施に伴い、中高共に45分×7時間授業、土曜日を休日にする新しい取り組みを行った初年度であったが、学校評価委員からは「とても良い環境づくりだと感じる」など、好評を得ている。次年度もこの取組を続け、部活動、生徒会活動、環境教育などを今まで以上に積極的に進めていきたい。また、中長期事業計画の中でも述べているように、グローバル教育の推進に力を入れ、生徒の満足度を高めていきたい。次年度は、コロナ禍で滞っていた韓国の姉妹校との交流、ニュージーランドでの語学研修、海外修学旅行を実施する。加えて、環境教育とグローバル教育の推進を、探究活動を絡めて積極的に取り組む。